



閑さや 岩にしみ入る 蟬の声

校長 今野 敏晴

梅雨明けが待ち遠しい季節になりました。夏というと「閑さや 岩にしみ入る 蟬の声」(ああ何という静けさだ……。岩に染み通っていくような蟬の声が、いよいよ静けさを強めている。)という俳句が思い浮かびます。皆さんご存じの「松尾芭蕉」が詠んだ俳句で、代表作「奥の細道」に入っています。梅雨明けの7月13日に山形県、立石寺に立ち寄ったときに詠んだ句です。実は、私の出身が山形市で、立石寺にも何度か行ったことがあります。この句は子どもの頃から親しんでいたにも関わらず、蟬の鳴き声がうるさいのだから、「閑さや」というより「何たるやかましき」ではないのか、そんな疑問が浮かんでくるくらいあまり詳しくありませんでした。この機会にと思い調べてみました。

「芭蕉は45歳のとき、門人の曾良と共に江戸を出発し奥州、北陸方面を巡る旅に出ます。その旅は、行程約2400km、7か月間という大旅行です。多くの困難が予想されていましたが、『たとえ旅路の途中で命を落としてしまっても、それは天命だと思い全く後悔はしない』と覚悟を決めて臨み、旅の途中で見た情景や心情を数多くの俳句として残しています。

立石寺は、森深い静かな山の上にある寺院。この山は、元々は僧侶の修行の場で、小さなお堂があちらこちらに建てられています。立石寺の階段は1070段。登った先の景色は、思わずため息が出てしまうような風景が広がります。蟬が鳴くと山に反響し、こだまとなって戻って来ます。つまり、蟬の声がこだまとなり戻ってくるほどに、立石寺はとても閑かな場所にあるわけです。芭蕉は汗をかいて登った山の上から、眼下にうねる緑の大地を見わたしました。頭上には梅雨明けの大空が果てしなく続いています。そこで蟬の声を聞いているうちに芭蕉は広大な天地に満ちる『閑さ』を感じとりました。この『閑さ』とは現実の静けさではなく、現実のかなたに広がる天地の、言いかえると宇宙の『閑さ』なのです。」(NHK100分で名著 参考)

「閑さや」という世界は、「芭蕉の澄んだ心」というのが調べた結果でした。「閑さや」に時間や空間さえ取り込んでいる芭蕉の心情を読み取ることがこの句の深遠さを理解するポイントだったのです。

芭蕉の心情ほどではありませんが、子どもたちの心もなかなか読み取れないことが多いものです。「ものは見えるが、ことは見えづらい」という言葉があります。見える「もの」は、具体的であり説明できます。しかし、今ここにある「こと」は、状況であり主観的である雰囲気も含んでいるため伝えづらいのです。子どもは本来「こと」が大好きです。遊ぶこと、がんばっていること、つくること、いっしょにいることなどです。大人の考える「つくるもの(作品)」ではなく、「つくること」そのことが好きなのです。しかし、「こと」をなかなか言葉にして正しく人に伝えることができないのです。

私たち教師は、子どもたちのつまずきやよい気づきを見逃さないよう、視線の先や表情、しぐさ、つぶやきなどから「子どもたちのしたいこと」を予想して支援しています。子どもたちの中にはきっと「芭蕉のような澄んだ心」や「伝えられなかった思い」が隠れていると思うからです。

緊張してがんばる学校あり、ほっとする家庭ありです。ご家庭では、子どもたちの「がんばったなあ……。疲れたなあ……。楽しかったなあ……。ちょっと辛かったなあ……。」の余韻の背景を感じ取り、励ましていただければ幸いです。そして、いっしょに過ごす「時間」をかけがえのないこととして大切に共有してください。子どもは「いっしょにいること」が大好きなのですから。